

「24時間すべてがリハビリ」の考え方で日常生活における動作をサポート。



5Fの車いすトイレ。前方ボードやはね上げ手すり、背もたれ、I型手すりが備えられている。前方ボードは、前に倒れる患者さんの転倒予防には、有効であるとのこと。

2017年10月にスタートした江東リハビリテーション病院は、回復期リハビリテーション医療に力を入れているカマチグループとして、都内で6番目の病院になります。江東区において、今までは60床程度しかなかった回復期病床を増やし、急性期医療と在宅の橋渡しの役割も担いながら、住み慣れた地域で暮らしていくための大きな支えとなっています。



明治通り沿いにある斬新な意匠の建物。すぐ近くに小名木川沿いの遊歩道があり、屋外でのリハビリもできる環境にある。

スペシャリストの「チーム医療」により生活の一部であるトイレでの排泄も促す。

急性期の病院で救急医療や手術を受けた後、そのままでは自宅に戻ることが困難な場合、専門施設でのリハビリが必要です。当院では、寝たきりにならないためにも「24時間すべてがリハビリ」という考えに立脚。身支度や食べる、座る・立つ、トイレでの動作など、日常生活におけるすべての動作がリハビリだと考えています。

リハビリのスタッフを多く雇用し、患者さんに合わせた治療計画を立て、スペシャリストの「チーム医療」によって身体能力や認知機能を高めるさまざまな訓練を実践。職業復帰をめざしたりハビリ体制も整えられています。また、トイレで排泄できることは生活の一部であり、人としての尊厳を守る重要な要素であると考え、極力トイレでの自立した排泄を推進。尿道カテーテルの入った状態で入院した患者さんも、尿道カテーテルからおむつ、おむつからトイレでの排泄へとリハビリを行っています。住み慣れた地域でずっと暮らす人々を支えるためにも、地域全体のQOLを見つめ続けます。



屋上リハビリテーションガーデンには、3種類の階段も設けられている。

江東リハビリテーション病院

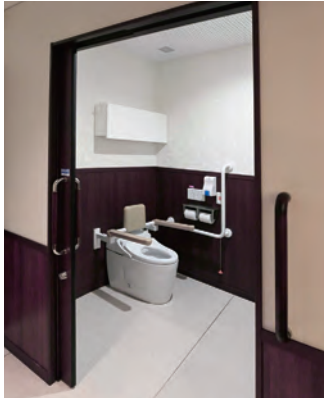
- 竣工年月/2017年8月
- 所在地/東京都江東区北砂2-15-15
- 施主/一般社団法人 巨樹の会
- 設計/平建築設計事務所有限公司
- 延床面積/13,175.84m²
- 病床数/300床



デイルームに設けられた、車いすでも立った姿勢でも使いやすい3連の手洗器。



スタッフステーションの出入口にあるスタッフ用手洗器。



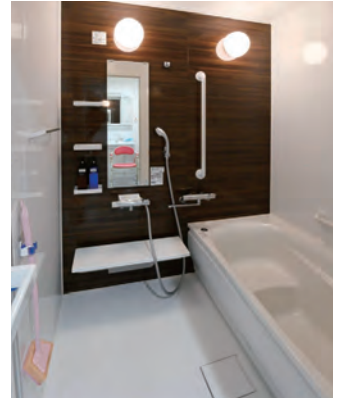
個室のトイレ。両側のはね上げ手すり、背もたれ、L型手すりの組み合わせは、現場の声で決定。タンクレスの大便器は連続使用できて良い。



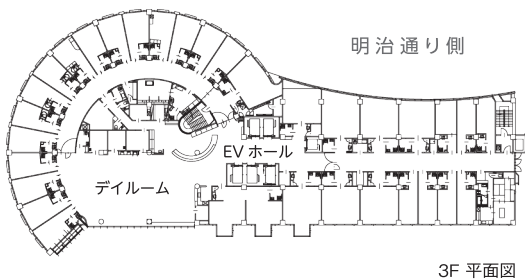
個室の手洗器。車いすで使う時期にも、回復して立って使う時期にも、どちらでも使いやすいという視点で選ばれている。



3Fのシミュレーションルーム内に設けられた、リハビリ用のトイレ。自宅復帰した時の動作を想定し、狭めの空間となっている。

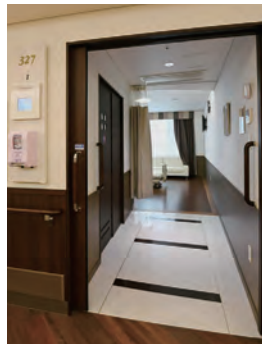


シミュレーションルーム内の浴室には、清掃用具なども用意。リハビリは最初にお湯なしで行い、その後お湯を入れて行動を確認する。



3F 平面図

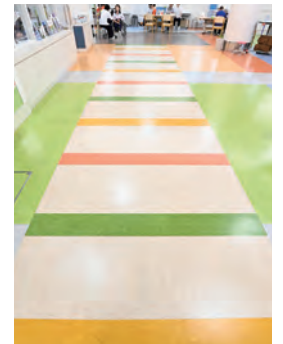
円形を生かしたフォルムには、小名木川沿いの美しいロケーションを取り入れるとともに、正面のマンションとの目線をずらすという意味もある。



個室の床にもシンプルでおしゃれなデザインをそれぞれに施している。



廊下の床には、3mおきに各階の明るいテーマカラーをあしらっている。



リハビリテーションルームの床は、1mおきのラインがカラフルなデザイン。

voice 院長先生からの声

満床であり9割以上の在宅復帰を実現しています。



院長
梅北信孝さん

江東区は、回復期や地域包括ケア病床が少なく、急性期医療後は無理に自宅へ戻られたり、遠くの療養施設に行かれる方が多いのが実状でした。そこで、入院型の回復期専門のリハビリテーション医療を提供すべく、206床で開院。増床後、300床のベッドはすぐ満床になりました。入院される地域の方々が、治療後ご自宅に戻られて元気に生活していただけることが、私たちの最大の望みであり使命です。

voice 設計担当の方からの声

廊下のラインもリハビリを考えたデザインです。



平建築設計事務所
代表取締役
平憲治さん

回復期の病棟には、急性期よりさらに生活の場としての役割が求められます。そこで、病院というよりも自宅に居るとか、ホテルに出かけている感覚を重視しました。ですから床もできるだけ均一なデザインにしています。廊下のボーダーラインは、廊下が長く感じられないように見せるため。遠く感じると歩きたくないと思う心理を考慮して、リハビリの効果を高めるためのデザインでもあります。

voice 病院スタッフの方々の声

退院した患者さんの元気な姿を近所で見かけるとうれしいです。



リハビリテーション科 主任 理学療法士
稲葉真己さん(左)
リハビリテーション科 主任 作業療法士
松本秀一さん(中)
5F病棟 副師長
中本忍さん(右)

中本:トイレの介助が必要な患者さんは8~9割くらいですが、介助しやすい空間になっています。
松本:トイレに行きやすいように、個室も多床室も、左右勝手に配慮した手すりのあるトイレを、その患者さんに合わせて選べるのは大きな利点だと思います。
稲葉:排泄はリハビリの中でも早く獲得したい行為なので、チーム医療でも共通の目標なんです。
松本:在宅復帰の橋渡しをするために、患者さん一人につき1~2回は自宅を訪れて、住まいの状況とさまざまな生活動作を確認し、ご家族との情報交換もしています。
中本:自宅に戻りたいのに施設に行かざるを得ないという場合もありますが、なんとかして自宅に帰してあげられないか考え、本人やご家族とのコミュニケーションを大切にしています。
稲葉:こうした病院が自宅の近くにある意味は大きいですね。退院した患者さんが、病院では歩行器だったのが、ADLが向上して杖で歩いているのを見かけたりするとうれしくなります。